

若手農家の若手農家による みんなのための情報誌



丹南地区青年農業者クラブ WaKaNo 第4号

(株) 雨風太陽 高橋社長による寄稿

WaKaNo のロゴが完成!

福井県立大学での出前授業や
JA越前たけふとの対談企画!



福井の食・地域に
つながりを!



SDGs 宣言

有限会社野矢商店は、SDGsが掲げる目標達成に向け下記の通り宣言いたします。

私たちはSDGs「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals)に賛同し、「誰一人取り残されない」世界の実現にむけ、2030年までに達成すべき17の目標と、169のターゲットが定められています。持続可能な社会の実現に向け積極的に取り組んでまいります。

持続可能な農業の創造

琵琶湖や郷土をはじめとした地域環境を守るための事業活動を行います。

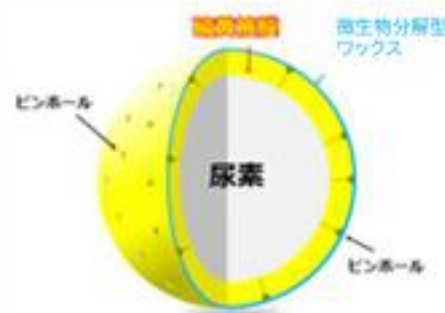
【主な取組】

- ・環境を考慮した商品開発や販売促進
- ・脱・マイクロプラスチック商品の宣伝拡大と周知の徹底



田んぼに **カラ殻** を残さない

硫黄被覆肥料を使用した
「環境にやさしい」
水稲用、麦用の一発肥料があります。



「硫黄被覆肥料」が土にかえるまで



施肥直後



約1ヵ月後



約4ヵ月後



1年～1.5年後



約6ヵ月後

分解された硫黄被膜は、養分として作物に吸収されます。

「硫黄被覆肥料」はプラスチックを使用しない環境に優しい肥料です。



「明日の農業に向かって」

元治元年(1864年)創業、実績と信頼の野矢商店です。

私たちは環境に優しい肥料・農業の提供で皆さまと共に歩みます。



天

創業元治元年

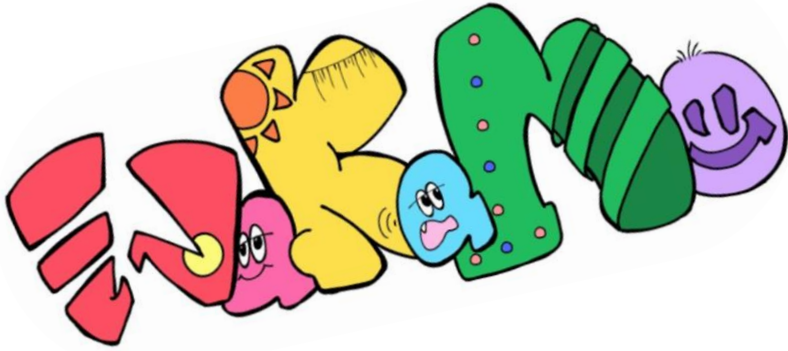
有限会社 野矢商店

〒527-0018 滋賀県東近江市八日市清水三丁目1番23号

TEL 0748-23-5588 FAX 0748-22-1069

URL / www.noya.co.jp mail / info@noya.co.jp

ロゴつくってもらいました！



武生商工高等学校の学生さんに、WaKaNoの活動のためのロゴの作成を依頼したところ、素敵な図案をいただきました。



クラブ員が直接学生さんたちにお話しする場をいただき、従来の農家像とは異なる、カラフルでフレッシュなイメージでロゴとキャラクターをつくっていただきました。



高校生の皆さん、ご協力ありがとうございました！

「丹南地区青年農業者クラブ」とは

福井県の越前町、鯖江市、越前市、池田町、南越前町のおおむね40歳以下の農業従事者で構成される組織。

情報交換や研修を通じて、お互いの農業技術や経営手腕を磨くクラブである。全国各地に同様のクラブが多数存在し、それら総称して「4Hクラブ」とも言う。

フリーペーパー

WaKaNo とは！

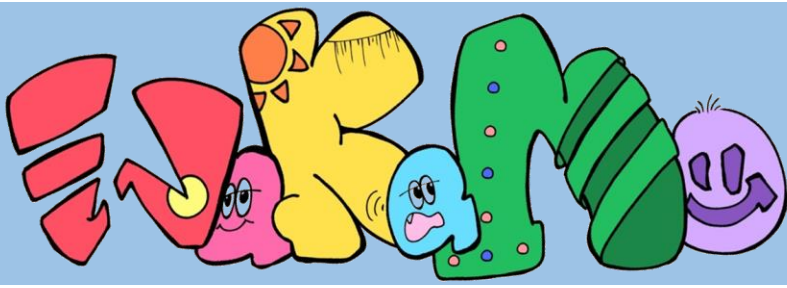
丹南地区青年農業者クラブの若手農家が制作したフリーペーパーです。

若手農家の生態、日常、魅力、考えていること。今わたしたちが伝えたい、でも知られていないあれこれを自分たちの言葉でお届けしたい。そんな想いで、忙しい日々の合間をぬって制作しました。

今回で第4号！

発行・制作：丹南地区青年農業者クラブ事務局
〒915-0882 福井県越前市上太田町41-5
丹南農林総合事務所 農業経営支援部
☎ 0778-23-4532

本誌掲載の写真、図版、記事等を無断で複写・転載、インターネット上で使用することは禁じます。
本誌データは2026年1月現在のものです。



目次

03 ログ完成!

04 目次

05 寄稿 - (株)雨風太陽 高橋 博之 様「食の力で、都市と地方をかきまぜる」

06 届け! 現場の声~to 県立大学~

10 木戸口 美波「農業」

11 対談 『越前たけふ』の生存戦略

14 丹南地区青年農業者クラブのクラブ員紹介

16 編集後記



“手頃で手軽” 水田管理の強い味方
Aquaport
 アクアポート



水田水管理の省力化といえば
自動給水機アクアポート!!

「手頃で手軽」
 水田水管理のベーシックモデル

アクアポート
Aquaport

業界最安値
¥49,800(税込)



製品名	アクアポート	アクアポートプラス	アクアポートタイマー
型名	AP-001	AP-002S	AP-002T
タイマー(時刻)による給水開始動作	×	○(5時、11時、17時、23時)	○(5時、11時、17時、23時)
タイマーによる止水動作	×	×	○(3時間、6時間、10時間)
センサーによる給水開始動作	○	○	×
センサーによる止水動作	○	○	×
メーカー希望小売価格(税込)	¥49,800	¥59,800	¥49,800



食の力で、都市と地方をかきまぜる

代表取締役社長 高橋博之

全国の農家や漁師から直接商品を購入できるオンラインマルシェ『ポケットマルシェ』など、**「都市と地方をかきまぜる」**サービスを提供している**（株）雨風太陽様**より、代表取締役社長の**高橋博之様**から**コラムの寄稿**をいただきました！**本当にありがとうございます。**

今、日本では都市と地方、生産者と消費者、人間と自然とのつながりが分断され、本来支え合う関係が見えづらくなっています。私が代表を務める雨風太陽の使命は、『都市と地方をかきまぜ、人と人、場所と場所をつなぐこと。生かし生かされる関係を取り戻し、感謝や喜びを感じられる社会をつくること』です。

私はこの10年で全国を8周し、1200回以上の座談会を通じて、生産者と消費者の対話を重ねてきました。その原点は東日本大震災にあります。当時、岩手県議だった私は、被災地で都市の消費者と地方の生産者が出会い、共に行動する中で関係性が深まっていく様子を目にしました。震災前から過疎化や高齢化に苦しんでいた農漁村では、生産者が生計を立てられず、後継者も減少していました。ボランティアとして被災地に訪れた都市の消費者は、そのような地方の生産現場の実態に心を痛めたり、食べものの裏側にいた生産者の哲学や生き様に共感したことで、継続的な復興支援に参加していききました。

一方、支援に訪れた都市の人々もまた自然や人との関係を取り戻し、生きる実感を得ていました。困っていたのは地方だけではなく、つながりを失った都市も

同じだったのです。生産者と消費者が関係を紡ぎ直すことで、『疲弊する都市』と『衰退する地方』の双方を救えると確信しました。

この気づきから生まれたのが「食べる通信」と「ポケットマルシェ」です。食べる通信は、食に『参画』する回路を開くことを目的に、海や土から食卓までの物語を共有し、生産者の思いや哲学に触れる機会をつくりました。知る、買う、体験する、学ぶ、交流する。そうした行為を通じて、断絶していた「つくる」と「たべる」がつながっていきます。そして、その動きを加速させるために立ち上げたのが、産直ECの「ポケットマルシェ」です。アプリとして機能させることで、農家の方は畑にいながらポケットの中のスマートフォンで、毎日マルシェに出品できるようにしました。

農作物は病気になることがあれば、死ぬこともある。そうした生産品の裏にある「生産者の魂」を知れば、再生産可能な価格で買おうと考える消費者が増えるのではないかと思えます。1人でも多くの消費者に、ポケットマルシェを通じて生産者の顔を知っていただきたいです。

こうしたサービスを通して、異なる世界を生きる生産者と消費者が『共感』で

つながります。こうした情緒的なつながりを私は、「関係人口」と呼びました。「関係人口」はいまや国の政策にも取り入れられています。関係人口を地域再生主体として、農漁業者の生産活動や地域課題の解決に参加させていくことができれば、生産者や地域住民の当事者意識も涵養され、外と内の協働による課題解決が始まります。

たとえ人口が量的に減っても、地方の現場に関わる人が増えていく、人口の「質的変換」がなされれば、地域社会の再生は可能なはずです。その突破口を切り拓く可能性が「食」にはあることを示したいと思えます。



関係人口

都市と地方を同時並行で生きる



東日本大震災から能登の復興へ、飛びこんで助けた。限界「つながり」を突破するためのキーワード
都会を満たし、地方を助け、あなたを再生してくれる。

高橋博之



届け！現場の声 ～to 県立大学～



沢崎 雄登

南越前町南条で生まれ、福井県立大学生物資源学研究所を卒業。機械加工会社に2年間勤めた後、地元南条にある(株)そまやまビレッジに入社を決める。就農1年目。

永木 友也

越前市今立で生まれ、他業種に8年間勤務ののち、父の経営する農業に転職。水稻、ネギやキャベツなど、年間を通じた栽培と、六次化にも取り組んでいる。同世代の従業員たちと奮闘中。

野村 直樹

大阪府出身、現在南越前町南条で切り花栽培をしている。編集長として取材同行。

若手農業者が、福井県立大学に、行って来た！

農業経済学のとある一コマのお時間をいただき、大学生の皆さんに向けて発信してまいりました。

- ・若手農家がいかにして就農したのか。
- ・若手農家が見据える食の未来とは。
- ・米不足と米価高騰への、農家からの視点 などなど、ありのままの声をお届けしました。(2025/7/11)



若手農家への依頼

前号、WaKaNo第3号を広く県内にお届けしたところ、福井県立大学の農業経済学講師である堀田学教授からお声がけいただきました。丹南地区青年農業者クラブからは、永木農産の永木友也、そまやまビレッジ株式会社の沢崎雄登、野村フラーフラーの野村直樹の3名が講師として伺うことに。

「学生たちに対して、普段の講義だけでは分からない、現場の生の声を届けてほしい。就農のきっかけや現在挑戦していることなどについて聞きたい。」とのご要望をいただきました。我々としても世間を騒がせる米不足を始めとして、農業がいかに他人事ではない世界なのかを若い人たちに知ってもらいたい！

そんなわけで、米農家を基本に据えつつ、立場や経歴の違う3名が話して参りました。以下はその内容になります。



農家一年目

(沢崎雄登)

私は実家が兼業農家で、小さい頃から田んぼの様子を見ていたので、高校生くらいの時には生き物や米作りへの関心がありました。現在所属しているそまやまビレッジ(株)では、生産の現場においてコストをいかに抑えられるかを自分の役割として働いています。

私が農業に転職したきっかけは二つあります。一つは前職での神経をすり減らすような働き方が合わなかったこと。もう一つは子育ての環境として、夫婦ともに慣れ親しんだ地元南条を選びたかったことです。

実際に農業を始めてみて感じたことは、やはり自然と触れ合う時間が増えたことが一番です。また、農作業の適切なタイミングを計るために、毎日のように田んぼの様子を見に行く必要があり、その責任の重さを実感することにもなりました。

農業の未来を描く（永木友也）

予想と違ったこととしては、地域で助け合って農業が成り立っているという事です。孤独に淡々と仕事を進めるものだと思っていました。現場でアクシデントがあれば、近くの農家さんが助けてくれたり、逆にこちらから手を差し伸べることもありました。私たちの会社ではそんな地域とのつながりを大切にしています。小学生向けにそば打ちや餅つきの体験などの食育活動や、地域住民との交流も行い、「開かれた農業」を日々実践しています。

この仕事を始めてから一番やりがいを感じた瞬間は、自分が発芽処理をした稲の種子が、無事発芽してくれたことです。とても責任のある仕事を任されて緊張しましたが、生命が芽吹く瞬間はとても尊いものだと感じました。今後の目標は、地域の皆さんに向けて日ごろの感謝を伝えられるような活動に取り組みたいと思っています。

講義の感想

大勢の大学生を前に話すのは大学時代の研究発表以来でしたので、そこそこ緊張しましたが無事話し切れてよかったです。米の販売価格だけが取り上げられている状況でしたので、製造原価も含め話をさせていただきました。かなり真剣に聞いてくれている学生さんが多く見受けられたのが、今回の講義をさせていただいたことの一歩の収穫でした。

越前市に拠点を置く永木農産では、若い農業者が多く活躍しています。その若者が中心となり、SNS等を駆使し地域に貢献できる農家を目指しています。特に食を作る楽しさを幅広い世代に伝えたいと思っています。では、なぜ、楽しいのか！

まず、若い世代が集まり、自分達で考えながら作業できる点です。自分たちの考えを実践しやすい環境なので、責任感も生まれ、達成感も感じることができ、仕事が楽しくなります。

最近の取り組みでは、キャベツを栽培していた水田を利用した稲作です。通常、稲作では化学肥料や有機肥料を使うのですが、キャベツ栽培後の水田にはなにも入れず、キャベツの残渣だけを栄養分として育てます。

今は女性社員も増えて、今までの常識に縛られずに仕事をするのが大切です。髪型やピアスは自由にしてもらっています。GWにもしっかりと休んで家族のために時間を使ってもらっています。家族にも応援してもらえる農業でありたいので、その分、働くときはしっかりと働いて従業員同士で励ましています。

うちの社長は、「地域に寄り添い、地域に還元する農業」を目指しています。なので、キャベツの残渣を米作りに再利用したり、直売所で安く売るこ



とで地域の為になりたいという思いで働いています。たこ焼きなどのテイクアウトのお店も始めました。

2025年のチャレンジとしては、大や企業さんと協同プロジェクトを行い大阪・関西万博に出展したことです。地元の伝統産業である越前和紙の原料を地元産のうちの大麦で代替するという取り組みを行いました。

これからも「魅せる」農業、楽しそうじゃんって思える農業をしていきます。

講義の感想

正直、どこまで伝わったか不安ですが、現状は少しお話できたかと思っています。閉鎖的な業界だからこそ、もっと情報発信したり、地域や県と交流をしないといけないと強く感じました。

学生たちは面白そうな事、少しの疑問でも検索できる力を持っています。その検索にもっと引っかけられる農業を目指したいです。

フリートークのお時間

講義の後半は、永木、沢崎、野村の3名が登壇し、自由にお話ししながら学生さんからの質問をキャッチしようとした。が、少々バタバタしてしまつたので、堀田教授のお力をお借りして質疑応答することに。

Q. どうして農家は地域とのつながりを大切にしますか？

沢崎..ほとんどの田んぼは自分たちの所有ではなく地主さんから借りているもの。その関係性は大切にしていかないといけないと思っています。

永木..自分たちが住んでいる場所でもあり、自分たちの子供が育つ場所でもある。のびのびと生きていける環境を守っていききたいですからね。

Q. 地域とのつながりの、めんどくさい部分はありますか？

永木..世代間ギャップ。スマホで天気予報見ると、サボつてるとか言われる。休みが多いのも悪く言われる。野村..草刈りのタイミングへの庄。大事なことなだけで、それぞれ思っている適切なタイミングが違う。沢崎..水管理が大事なんですけど、共有してるから取り合いが起こること。

Q. 規模拡大や大きい農家への集約化って、この先まだまだできますか？

永木…できます。昔からの方のこだわりでストップしている部分はあるので行政とかが手助けしてくれると。野村…担い手の多くが70代になっているので、数年のうちに集約化せざるを得ない状況になると思います。

Q. 米価高騰と言われる今年の価格、どう思われますか？

沢崎…生産原価から考えると、今までの値段で継続して栽培するのは難しい。高騰した今より少し低いくらいが適正だと思います。

永木…機械の更新が5、6年ごとに必要で、その度に数千万円の儲けを生み出しておかないといけない。若者が余裕をもって農業するには、もう少し値段高くていいんじゃないかな。

Q. 政府がオーガニックを増やしていくという方針を出していますが？

野村…意義があるとは思いつつ、人手の足りない農業現場で現実的にやっていけるのは難しいところ。

永木…うちの若い社員たちと話し合いました。労力も時間もかかって、思ったより稼げるわけでもないから、やりたくないよねって結論になってます。

学生さんからの感想！！

ありがとうございます～

丹南地区青年農業者クラブの方々の実体験を基にしたお話を聞いて、農業に対して持っていた堅苦しいイメージが取り払われた。また、地域とのつながりや食育活動などといった社会貢献の面でも様々な取り組みを行っていたことを知り、とても素晴らしい組織であることも分かった。

農業という業界では、世代間ギャップや技術確立までの年数など幅広い面での問題・課題があり、それに対しても熱心に取り組んでおり、自分たちが食べている米や野菜の有難みを再確認することができた。

若者が新しい技術を積極的に導入し、負担の軽減やイノベーションによる効率化を図ることは新規参入者のハードルを下げることに繋がり良い事だと思った。

しかし、農業だけで稼ぐことは厳しいという現実も売上に占める補助金の割合を見て改めて感じた。少しでも黒字にするべく6次産業化も現代ではかなり重要な手段であると感じた。

革新的なものだけでなく、地域内での連携や協力して農業を行うことも重要であり、伝統的なものと最新の技術の組み合わせが今後の農業の中で必要になると感じた。

食と農業の未来に責任をもって提案できる企業でありたい。

お客様の「美味しい」という笑顔の為に
お客様の「楽しい」という喜びの為に
お客様の「嬉しい」という感動の為に

私たちは種を通じて貢献します。

FUKUI SEEDS

福井シード株式会社(本社)

〒910-0842 福井県福井市開発5丁目2004番地

TEL:0776-52-0262 FAX:0776-52-0258

HP: <http://www.fukuseeds.co.jp> E-mail: info@fukuseeds.co.jp

【営業品目】

バイオ苗・苗・農業用資材・肥料・農薬・造園・園芸施設・種子(野菜種子・花種子・種馬鈴薯・水稲種子・特産種子・伝統野菜種子)・ジャガレンジャースタジアム(自社オリジナル規格商品)

ベジプロセンター(研究・生産施設)

〒919-0526 福井県坂井市坂井町上兵庫84字太郎丸14番

TEL:0776-72-2570 FAX:0776-72-2571

E-mail: vpc@fukuseeds.co.jp

【営業品目】

バイオマト苗の生産・植物のウイルスフリー化、及び、保存

ベジプロセンターでは長年培ってきた培養技術を活かし、親株のウイルスフリー化、親株保存、親株増殖などのサービスをご提供いたします。
イチゴ、サツマイモ、花卉苗なども含めて、様々な栄養繁殖系品種の保存や増殖でお困りの場合は、是非、ご相談ください。

クボタスマート農業

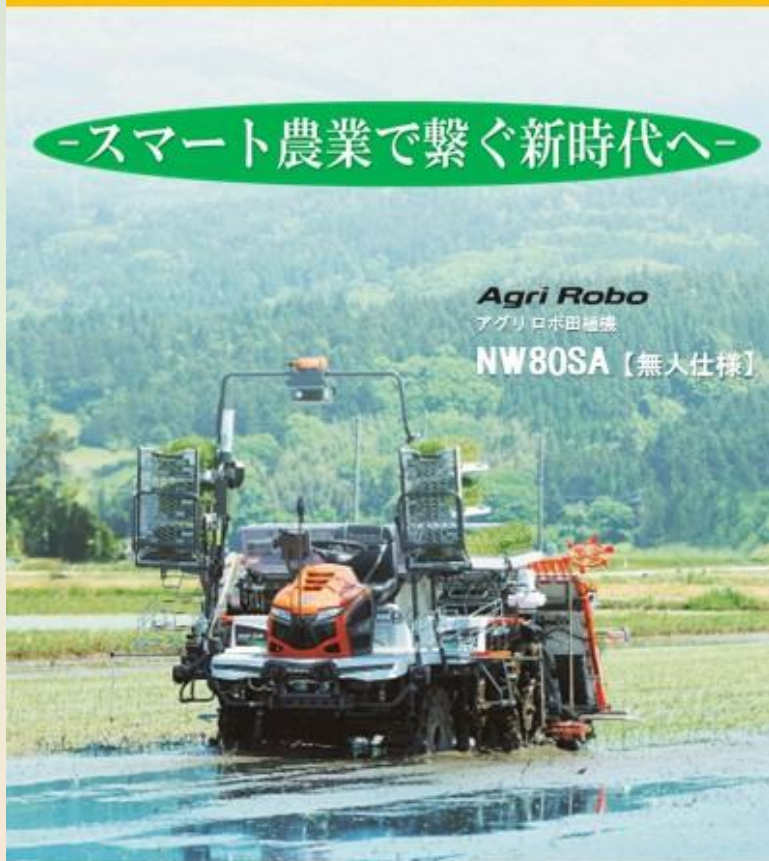
これからもお客さまとともに、一歩先へ。

-スマート農業で繋ぐ新時代へ-

Agri Robo

アグリロボ田植機

NW80SA【無人仕様】



株式会社北陸近畿クボタ

■松江営業所 ■〒916-0029 福井県松江市北野町11-28 ■TEL.0778-51-2444

■武生営業所 ■〒915-0816 福井県越前市小松1丁目7-17 ■TEL.0778-22-2796

■南越前営業所 ■〒915-0006 福井県越前市砂崎町7-4-1 ■TEL.0778-27-7711

お米に関する ご相談承ります！

▼お問合せこちら▼

(TEL)0776-38-1000

(mail)okome@fukuseimai.co.jp



YouTube



X



福井精米株式会社

〒918-8171 福井県福井市森行町5-15-2

農業ふれあい会 会員募集中！

～農家の集い～



◇活動目的

越前市(旧武生市地区)地域で稲作、園芸、畜産などの農業を営むメンバーと食育に携わるイベントに参加して地域の方々へ農業をより身近に感じていただけるような活動をしています。また、会員同士の情報の共有を行い、自身の農業の経営安定を図ります。



◇会員資格

越前市(旧武生市地区)に住む60歳以下の農業を営む方。
詳しくは農業ふれあい会事務局
(JA越前たけふ営農販売課)まで



TEL 0778-21-2608

農業で地域を一緒に盛り上げましょう！！

創業50年
以上の実績

風雪に強い
ビニールハウス

長年の経験と
丁寧な対応

M(株)モリタ

〒918-8016 福井市江端町6-37

TEL 0776(34)1222 FAX 0776(34)1224



福井は「コシヒカリ」が代表です。宮城は「ひとめぼれ」、秋田は「あきたこまち」、山形は「ササニシキ」。他にも47都道府県それぞれに銘柄米があります。米だけでなく野菜、畜産、水産、他にもたくさんあり、どこにいつて食しても美味しいんです。私の中ではどこが1番美味しいなどないんです。その土地の気候や風土に合わせて、一生懸命品種を改良したり、手順を変えたり変えなかつたり。現代ではスマート農業へ移行していく流れをひしひしと感じています。

私のやり方は、少し逆行しているように思われるかもしれませんが、とにかく田んぼを歩きます。田んぼは、同じように並んでいますが1つ1つ全然違います。頭を使い体を使いい汗をかき、やり方や目的は様々ですが、種から育てて実らせるまでにたくさんさんの労力がかかっています。失敗したらやり直しはできません。そこだけは皆一緒だと思います。

では、消費者はどこをみて選ぶのか。農業に縁もゆかりもない方だつていっばいいます。味？産地？値段？選ぶ上で大切です。しかし、そこだけではないと思っています。『生産者がどんな人か、どんな思いで作っているか』これらが大切だと感じています。

私は以前、欲しい物がありお店にいったものの、いい加減な接客を受けて悲しくなり、結局欲しかった物も欲しくなくなつてしまつたことがあります。その逆もあつて、目的もなく入つたお店で、定員さんの対応や雰囲気であつたく予定してない物を買つてしまうこともあります。

嫌な気持ちで無理矢理買った物は、自分の頭の中で「お金」が残ります。「あんなに高

かつたのに：」使うたびに嫌な気分になり、結局使わなくなつたりします。逆に、気持ちの良い買い物をした時は「心」が残ります。「あのお店よかつたなあ。また行こう。大切に使おう。誰かに教えよう！」と、いつの間にか金額なんて忘れてしまう。

この考え方は、農業に限らず、どの分野も同じだと思います。付加価値をつけて高くなつても、それに勝る熱意や愛情があればそれに気づく人はいます。私はそんな人たちに選ばれる生産者になりたいです。私の続けていきたい農業は大切に育て愛情をかけて自信を持つて、「うちの米うめーから食べてみる！」って言うたいんです。万人に好かれようとは思いません。「どこかの誰かには引つかつてほしい！」と思いつながら仕事をしています。

もう一つ、私には仕事をする理由があります。『幸せになりたい』。誰かを幸せにするために働いてはいません。1番は自分です。自分が幸せになりたい。では、私にとつての幸せを考えたときに最初にでてくること、それは、私を見てくれる人、夫、家族、友達、仲間、お客さん：大切な人が私のまわりにはいます。

私にとつての幸せは、その人たちが元気なこと、そして、田んぼに入ることです。私の知る限りの人達が、笑顔で元気でいたら、私はとにかく幸せなんです。突然会いにいつて、クタクタになりながらも笑顔で子育てして、子供と一緒にもりもりご飯を食べ、ガーガー寝ている友達を見て幸せを感じます。その食卓にならぶ米が私の作つた米ならばなおさらです。

ばあちゃんが新米を見て、笑顔でいいちゃんの写真の前に持つて行き、「美波のお米だよ。一緒に食べよう。」と話しているのを見て幸せを感じます。「やっていてよかつた」と。家族に今日は炊き立てだと伝えると、両手を上げて喜ぶ姿に幸せを感じます。そんなことを思い出しながら田んぼに入っている私は、なんて幸せなんだろうと思つてます。

『ひとつも同じ農家はいない』
それならば、私みたいな農家が1人いても何も問題じゃない。そして、とにかく私が幸せを感じ笑つていたら、笑う人がいるかもしれない。その人が笑つていたら、その人の隣にいる人が笑うかもしれない。いつの間にか私の知らない人も笑つていてくれるかもしれない。

私が幸せを感じ、楽しく本気になれるのが「農業」なんです。
時代はみるみるうちに変わつていきますが、変えずに守つていくことも、ものすごく大切で、1番の自信になる。そう思つて、今日も田んぼに入ります。




種子コーティング

神煉
KAMINERI

TAKAOKAYA Co., Ltd.

福井営業所
〒910-0843
福井県福井市西園苑三丁目713
TEL:0776-52-1430 FAX:0776-52-1426

高岡屋



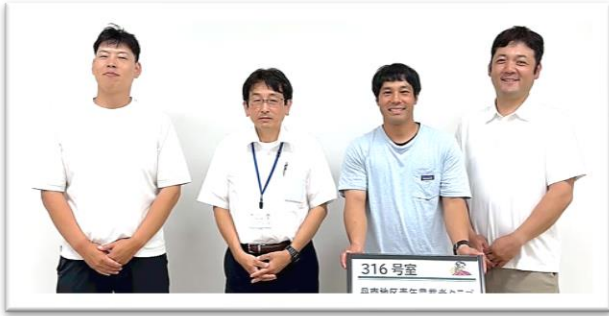
「越前たけふ」の生存戦略 中山間地と有機・減農薬農業

福井県越前市および南越前町に所在する「JA越前たけふ」。農協としては珍しい「独自路線」を貫くことで有名で、我々クラブ員も多く加入しています。

今回、JA越前たけふの特徴の一つである「有機・減農薬への支援」をメインテーマとして、大久保部長との対談のお時間をいただきました。ができました。

クラブからは、有機・減農薬に取り組む米農家である3人が参加。

米価高騰に沸き立つ時代において、冷静に、しかし熱意をもって未来を見据える現場の人たちの声をお伝えします。



(左からクラブ員笛吹、JA大久保部長、クラブ員井上、クラブ員内藤)

大久保部長

JA越前たけふは有機にも力を入れているんですけど、平成19年に環境調和型農業にスポットが当たったのが始まりです。有機に取組む方と農協って、少し相反するようなところがあったんですけど、そういった方も巻き込んで、地域でこの農業を進めていこうとしました。

まずは減農薬・無農薬栽培ができるよう温湯消毒装置を導入しました。次に、食味分析計でお米の成分を測定して、今の「インセンティブ買入れ」の先駆けの制度を始めました。食味80以上はプラス千円という風に。なおかつ特裁（特別栽培米。減農薬などの基準を満たした栽培法でつくられた米）や有機をやるための申請を、個人では面倒なので全部農協がお手伝いしてきました。

そういった品質管理を厳格化することで有機や減農薬を評価したい、だけど福井県全体で販売をしているとそうはできない。そこで全農の系統販売をやめたのがこの年だったと思います。国内のコメ消費は5割近くが外食中食で消費されている、そこをターゲットに販売し始めました。農家の汗や努力に報いるようインセンティブ買入制度というのを進めて、省農薬「あきさかり」（米の品種）に関しては外食産業と契約栽培を行っています。

有機や特裁が増えた理由は、コメ代金も大事だけど補助金も含め農家所得の向上に貢献したからだと思います。慣行栽培（今まで通り農薬を使用する栽培法）から減農薬するにしても、いきなり厳しい基準の栽培に変える方っていないです。段階を踏んで軽い基準も支援して、JASや特裁にも挑戦してもらいたいと思っています。平成27年から買い取りに近いことをやっています。この頃は全国的にコシヒカリ1俵（60kg）平均1万円です。そういう時期に省農薬あきさかりには1万4千円、特裁コシヒカリには1万5千円とか4千円で契約栽培を始めました。食味の高いものも評価をしていく。

今、有機のコメと慣行の価格差がなくなってきているので、有機の作付面積も減っています。米価が高くなると、手間暇かかる特裁とか有機が減少するんです。値段少ししか変わらないのに何でここまでせなあかんのか、それなら慣行栽培にするわ、ってなっています。それでも、有機がほしいという方は増えています。それと、全国で有機をしている農業者がリタイアしているようです。そういう農家のリピーターさんから、米を譲ってもらえないかっつてオファーが年々増えているので、諦めずに続けていきたいです。



井上

私は越前町（JA福井県管内）になりますので、農協さんで有機の買入はなく、ほぼ自社で販売をしています。昨年（令和6年）私も胃に穴が開くんじやないかってくらい、売値をどうするか悩みました。結論、慣行の上げ幅と同じだけ思い切って上げたんです。結果的に今年（令和7年）の年明けにはほぼすべての農家さんが「井上君の判断正しかったね」って言うてくださったんですね。

やっぱり農業って、今この暑い中やっていまして、決して楽な仕事ではない。その中で自分たちの価値を自分たちで下げちゃいけないという思いがありまして、値段を上げました。説明とか営業努力はもちろんするわけなんですけど、ぜひ農協さんにも頑張って値段交渉をしていただきたいなと。それが今後、有機に取り組む農家を増やす一番の部分になると思っています。

大久保部長

特に有機栽培のお米は、皆が少しずつ取り組むことで、100ヘクタール確保して販売も8千俵くらいを販売していると思うています。8千俵なら売れる自信がある。ただ、8千俵契約してるのに、出てくるのが4千俵や2千俵しか出てこないのもこの有機の悲しいところなんやね。うちの担当も、一生懸命謝ってます。ごめんさい、ごめんさいって謝って歩いている。それも有機の弱点かなって。

J A越前たけふさんすごくいい取り組みをしてるんですが、今コメの集荷に特に苦労しているということについて、概算金の表示がとつても惜しいなと思えます。概算金にプラスして追加払いと精算払いを含めると、他の卸売業者より高い金額を最終払っていただけてるんですね。だけどいつも後出しじゃんけんされて、概算金だけで見ると高い金額を他の業者が提示している。そこでさらにJ Aも後出しじゃんけんして、「J Aに出せばよかった」って思うくらい打ち出し方をされるといいのになって思いました。大久保部長

農協の概算金の考え方って、「共同計算委託販売」っていうんやね、農家から販売を任されているだけなんです。農協が買い取って売ってるんじゃない。その際に生産者の方に仮渡金を支払って、販売の見通しが立った時点で生産者に追加払いをしています。

米の販売って、十万俵とか百万俵あると15か月とかかけて売るんです。初めに出した笛吹さんのところは高かった、その次出した井上さんのところは安かったっていうわけにはいかんですね。参考にアンケート調査を取りました。J Aの精算方法への希望をいろいろ聞いたんです。一番あったのは2万3千円から5千円という価格を5年から10年続けてほしい、機械の更新や人の雇用ができるように保険をかけてほしいっていう。

そのあたりが最低保証額だろうと設定しています。

笛吹

あとは省農薬あきさかりとかめっちゃいい米で、品質も食味も良いと思って、僕はずっと親の代から契約してるんですけど、もつと評価してほしい。特裁3番のコシヒカリのインセンティブの価格より、省農薬あきさかりを評価してほしいなと思いますね。殺虫剤使ってないんで。大久保部長

言われる通り、農薬1回だけというのは評価されるべきだと思います。実は全国フランチャイズの外食産業の卸先、そこが毎年生きもの調査とかをしています。ここで検査されるんです、ものすごくこだわってるんです。もう1回いもち病だけ農薬使わせてくれ、大変なことになるんやっと思ってるんです、大減収するので。それでも今は認めてもらえない。そんな中で省農薬あきさかりを選んだ理由は多収でもちに強い。笛吹さんが言う通り品質が良くてもち病もかかりにくいんです。そういうことで、このあきさかりでお願いしているところです。



内藤

僕は「コウノトリ米」（コウノトリが生長できる環境を目指す栽培法）を出荷するようになってから、J A越前たけふさんの正組合員になりました。特裁の申請も団体申請してくれて事務負担が減ったので、すごくありがたいなっていう感想です。

コウノトリの部会に入って初めて活動に参加させてもらったとき、思ったよりちよつと年齢層が高かったのが気になりました。

本当はもつと越前市のコウノトリ米を学校給食に使えたらいいなと思っています。越前市の子供たちに越前市で採れたお米を食べてもらえると、生産者としても辛い仕事も頑張れる。子供達も越前市で採れた米を俺ら食べてるんやっと思うと、一人二人、将来は米作りやろうかなと思ってくれたら嬉しいなって。実際には生産量が少なく学校給食の求める量を満たせていないようなので、このブランドの生産・集荷の量を維持していくために、ある程度の売り上げの基準を維持して頂きたいと思っています。大久保部長

部会

部会の年齢層が高いつていうのは、まじまじに感じます。リタイアが相次いでいる中、後継者が出てきたかっていうと、最近まで米価が低迷していたのでなかなか出てきていない。そんな中で若い世代に有機栽培をやってもらおうの問題なのが、除草と施肥の労力だと自分は思っています。若い世代が手作業で除草とか、重たい動力散布機背負って施肥をするのかっていう。うちの管内の若い方々が今の3倍を作付けして

もらうと農地が維持できます。そのため農協ができることが、

機械のリースとか作業受託だと思う。それも低コストで。そうやって皆さんが他産業並みの所得を貰えるのが当然だと僕は思っています。

内藤

平場は今後もつくる人いると思うんです。中山間地がもう獣害がひどくて。小さい田んぼでも獣害が無いならうらやましいなと。大久保部長

中山間地は過疎化して、住んでる人が少ないんですから。電気柵をずーっと奥まで張るのがもう無駄だということ、この谷を守るのには辞めてしまおうってなってます。それは止められないと思う。平場の効率が良いところで田んぼしたってみんな思ってる、悲しいかな、山間地で田んぼしてられない。

井上

若い方にどうやって有機に取り組んでもらうか、自分も色々考えるんですけど、



J A越前たけふさんですが、今コメの集荷に特に苦労しているということについて、概算金の表示がとつても惜しいなと思えます。概算金にプラスして追加払いと精算払いを含めると、他の卸売業者より高い金額を最終払っていただけてるんですね。だけどいつも後出しじゃけんされて、概算金だけで見ると高い金額を他の業者が提示している。そこでさらにJ Aも後出しじゃけんして、「J Aに出せばよかった」って思うくらいの打ち出し方をされるといいのになって思いました。

大久保部長

農協の概算金の考え方って、「共同計算委託販売」っていうんやね、農家から販売を任されているだけなんです。農協が買い取って売ってるんじゃない。その際に生産者の方に仮渡金を支払って、販売の見通しが立った時点で生産者に追加払いをしています。

米の販売って、十万俵とか百万俵あると15か月とかかけて売るんです。初めに出した笛吹さんのところは高かった、その次出した井上さんのところは安かったっていうわけにはいかんですね。参考にアンケート調査を取りました。J Aの精算方法への希望をいろいろ聞いたんです。一番あったのは2万3千円から5千円という価格を5年から10年続けてほしい、機械の更新や人の雇用ができるように保険をかけてほしいっていう。

そのあたりが最低保証額だろうと設定しています。

笛吹

あとは省農薬あきさかりとかめっちゃいい米で、品質も食味も良いと思つて、僕はずつと親の代から契約してるんですけど、もつと評価してほしい。特裁3番のコシヒカリのインセンティブの価格より、省農薬あきさかりを評価してほしいなと思いますね。殺虫剤使つてないんで。

大久保部長

言われる通り、農薬1回だけっていうのは評価されるべきだと思います。実は全国フランチャイズの外食産業の卸先、そこが毎年生きもの調査とかをしています。ここで検査されるんです、ものすごくこだわってるんです。もう1回もち病だけ農薬使わせてくれ、大変なことになるんやつて思ってます、大減収するので。それでも今は認めてもらえない。そんな中で省農薬あきさかりを選んだ理由は多収でもちに強い。笛吹さんが言う通り品質が良くてもち病もかかりにくいです。そういうことで、このあきさかりでお願いしているところです。



内藤

僕は「コウノトリ米」（コウノトリが生息できる環境を目指す栽培法）を出荷するようになってから、J A越前たけふさんの正組合員になりました。特裁の申請も団体申請してくれて事務負担が減ったので、すごくありがたいなっていう感想です。

コウノトリの部会に入つて初めて活動に参加させてもらったとき、思ったよりちょっと年齢層が高かったのが気になりました。

本当はもつと越前市のコウノトリ米を学校給食に使えたらいいなと思つています。越前市の子供たちに越前市で採れたお米を食べてもらえると、生産者としても辛い仕事も頑張れる。子供達も越前市で採れた米を俺ら食べてるんやつて思うと、一人二人、将来は米作りやろうかなと思つてくれたら嬉しいなつて。実際には生産量が少なく学校給食の求める量を満たせていないようなので、このブランドの生産・集荷の量を維持していくために、ある程度の売り上げの基準を維持して頂きたいと思えます。

大久保部長

部会の年齢層が高いつていうのは、まじまじに感じます。リタイアが相次いでいる中、後継者が出てきたかつていうと、最近まで米価が低迷していたのでなかなか出てきていない。そんな中で若い世代に有機栽培をやつてもらおうのに問題なのが、除草と施肥の労力だと自分は思っています。若い世代が手作業で除草とか、重たい動力散布機背負つて施肥をするのかつていう。うちの管内の若い方々が今の3倍を作付けして

もらつと農地が維持できます。

そのために農協ができることが、機械のリースとか作業受託だと思う。それも低コストで。そうやつて皆さんが他産業並みの所得を貰えるのが当然だと僕は思っています。

内藤

平場は今後もつくる人いると思うんです。中山間地がもう獣害がひどくて。小さい田んぼでも獣害が無いならつらやましいなと。

大久保部長

中山間地は過疎化して、住んでる人が少ないんですから。電気柵をずつと奥まで張るのがもう無駄だということ、この谷を守るのは辞めてしまおうつてなつてます。それは止められないと思う。平場の効率が良いところで田んぼしたいつてみんな思つて、悲しいかな、山間地で田んぼしてられない。

井上

若い方にどうやつて有機に取り組んでもらうか、自分も色々考えるんですけど、



スマート農業を有機農業としつかり結び付けていくべきかと。例えば、両正条田植えという、縦も横もキッチリ揃える植え方、そうすると除草機が効率よく使えて収量上がるとか。他にも衛星画像の利用によって、葉色を見て収量予測をしているとか。結局「今年は草を抑えられただけ、来年はどうかわからない」、そういう不安定さがハードルを上げていると思ってます。いま慣行農法ですと、節水型乾田直播みたいな、超超超省力化みたいな農法で、例えば一法人が数百ヘクタールやるような流れもあります。我々には、この真逆の戦略がやっぱり生きてくるのかなって。

大久保部長

その通りやと思います。ただこれを農家さんに「さあ、やれ」というのではなくて、それに基づいた営農指導ができないと、宝の持ち腐れになるのかなって感じがします。こういうのを活用して、なんとか反収を上げていきたいと思う。売る方はまだまだ自信があるので作っていたらいいんですけど、もっと精度を上げていかないと。



井上

有機やってますと、田植え終わって一段落じゃないんですね。そこから勝負みたいな感じになるので、普通の米農家さんと働き方も変わってくる。とにかく除草って時期があるので、なかなか休みが取れないのをどう改善してあげるか。従業員さんへの働き方改革も我々の年代が考えていかないといけないですね。中山間地っていう条件不利な場所へ、地域加算金みたいなものも作っていただけたらありがたいんですけど。

大久保

コウノトリ米がまさしくそんな制度です。白山・坂口（越前市中山間エリア）は水も冷たいし美味しいけど、反収は低いし獣害にもあうし草刈りも手間暇がかかる。けど農協としては白山・坂口だけを高く買うことはできないから、有機栽培をして「コウノトリを呼び戻す」というストーリーも乗っけて値段を高くしたのが始まりやった。

確かに思うね、中山間地でも全部作らせてあげたいって。先輩方からもよく言われましたよ、日本の農業は山間地で成り立っているんやって。やっぱり見えて、中山間地の方々の方が有機に取り組むね。どっちかって言うと越前だけふ農協が、特裁とか有機に取り組んでいる人が多いのはそれやってよく言われる。田んぼが小さくて土手が高くて、狭い面積で何百枚あるところがあって、だから少しでも高く売らなあかんって意識があるんでしょう。

自慢のお米
JAにおまかせ

地域に広がり、地域に根づく、拓かれたJA
JA越前たけふ

白山野菜出荷組合
全国に誇るブランドすいか

しらやま西瓜
生産者募集!

あなたも一緒にすいか作りませんか?

- とにかく元気な方
- すいかが大好きな方
- 自然と触れ合うのが好きな方

越前市白山地区の朝土と温度差が生み出す甘くてシャリシャリした食感のしらやま西瓜。日本一おいしいすいかとも呼ばれる名産品を栽培してみませんか?

収支シミュレーション (10aあたり)
※組合の機械を使用する想定

初年度	収入747,500-支出545,704=201,796
次年度~	収入747,500-支出249,738=497,762

SHIRAYAMA SUIKA

ご応募・お問い合わせはお気軽にどうぞ!

JA越前たけふ 営農販売課(担当:浅井)

お電話からのお問い合わせ ☎0778-21-2608

初めましての方もお世話になつて
る皆様も、お手に取っていただき
ありがとうございます！

おかげさまでWakano第4号、
こうして無事発刊となりました。

「おや？今回はページ数少なめです
か？」と思つたそのあなた、なか
なかのWakano通ですね。実の
ところページ数ですが、創刊号16
ページ、2号と3号は24ページと増
加傾向でいたのですが、4号は16
ページと少し減らしております。繼
続して制作するというのは、労力だ
けではない難しさがありますから
ね。

しかしその一方で、新たなチャレ
ンジもしております。この冊子をご
覧になるだけでは気づかないその
チャレンジというのが、「別冊をつ
くること」。4号に掲載されている
内容をより分かりやすい表現に変え、

**本誌は、(株)北陸スカイテック様からも支援をいただき
作成しております。**

アンケートのお願い

誌面向上のため
下記QRコードから
本誌のご意見ご感想を
よろしく願います。



広告を無くしたものを、全8ページ
の4号別冊として発刊いたします。

こちらの別冊は、主に福井県内の学
生に向けて配布を予定していますの
で、目にする事ができた方はラッ
キーです。

そう、16ページ+8ページで、結
局24ページ分の制作となつているの
でありました。

内容について！

今回、実は統一したテーマという
のは無くなつたのですが、見返して
みると学生さんと接する機会がそこ
そこあつたのと、先ほど述べた通り、
学生さん向けの別冊を予定していた
ので、後付けで「学び」をテーマに
しました。クラブ員紹介のページの
レイアウトを思いついたのもそのタ
イミングです。そもそも農業の世界
も日々学びの連続ですからね、うん
うん。そういうことです。

ではまた次回！

二代目編集長 野村 直樹

